

「チャレンジキャンプ」

- 1 趣 旨 サバイバル要素を含む長期の自然体験活動を通して、仲間と協力しながら課題に挑み、克服する体験によって、自己効力や感情を調整する力、他者を理解する力、親和性を伸ばし、以て青少年の困難を乗り越える力の向上を図る。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立夜須高原青少年自然の家
- 3 後 援 福岡県教育委員会
- 4 期 間 令和7年8月9日（土）～14日（木） 5泊6日
- 5 会 場 国立夜須高原青少年自然の家
〒838-0202 福岡県朝倉郡筑前町三箇山1103
- 6 対 象 小学校5・6年生及び中学校1・2・3年生 計24名
- 7 参加者 25名
- 8 日 程 8月9日（土）
活動① 「仲間づくりレクリエーション」
活動② 「野外炊飯 簡単パスタづくり」
活動③ 「テント設営」
活動④ 「チャレンジ内容の発表・目標設定①」
活動⑤ 「サバイバル術伝授 火熾し」
活動⑥ 「野外炊飯 シチューづくり」

8月10日（日）
活動⑦ 「野外炊飯 ご飯・味噌汁づくり」
活動⑧ 「サバイバル術伝授 拠点づくり」
活動⑨ 「野外炊飯 カレーづくり」
活動⑩ 「目標設定②72時間チャレンジの計画」
活動⑪ 「72時間チャレンジ」 ※8月13日(水)まで
(1)72時間を生き抜け！～あるのは限られた食材・道具、頼れる仲間のみ～
(2)拠点を築け！～雨風に負けないスミカで快適な生活を～
(3)地図を読み解き、宝を集めよ！～宝と引き換えに豪華食材ゲット！？～

8月13日（水）
活動⑫ 「片付け（原状復帰）」
活動⑬ 「生還パーティ（バーベキュー）」

8月14日（木）
活動⑭ 「振り返り」

9 活動の実際



【仲間づくりレクリエーション】



【野外炊飯】
(簡単パスタづくり)



【テント設営】



【目標設定】
(Being)



【サバイバル術伝授】
(火熾し)



【野外炊飯】
(シチューづくり)



【72時間チャレンジ】
(献立決め)



【72時間チャレンジ】
(食事づくり)



【72時間チャレンジ】
(拠点づくり)



【72時間チャレンジ】
(拠点完成)



【生還パーティー】
(バーベキュー)



【振り返り】

10 参加者アンケートから

各班において、帯同するスタッフが参加者から聴取する方法で実施した。下表はその抜粋。

設問	事業前の聞き取り内容	事業後の聞き取り内容
『仲間と協力する』と聞いてイメージすること	役割分担 いっぱい話す 助け合い 喧嘩をしない みんなと楽しく過ごす 仲良く話し合う 心を一つに	円陣 気遣い 思いやり 支える 一緒に寝る 難しいことに全員でチャレンジ

(事前)不安なことや心配なこと (事後)それをどう乗り越えたか	自然災害 体調不良 虫刺され 物をなくすこと 夜眠られるか スマホがないこと 暗いところが怖い 友達と仲良くなれるか	助け合った 不安から逃げた 暴言は少し吐いてしまった 友達がいたから大丈夫だった コミュニケーションがいっぱいとれた
「72時間」をのりきるために大切なこと	協力 楽しさ 遊ぶ 平常心 成長 みんなの知恵を絞り出す 計画性 仲良く てきぱき動く	譲り合い 繋がり 思いやり 話し合い 協力する意志 諦めない 時間を守る 「一緒にやろう」の声かけ

1.1 成果

- 今回の参加者アンケートは各班において活動の思い出や出来事を共有しながら聴取したことにより、本事業における参加者の学びや成長を把握することができた。事前アンケートでは過去の経験等からのイメージで回答していた様子だったが、事後アンケートではエピソード等とともに具体的に、かつ熱心に語る参加者の様子が見られた。特に、『72時間』をのりきるために大切なこと』の設問においては、「一緒にやろうと誘うこと」「諦めないこと」などの活動中に直面した困難やその際の具体的な会話などからの回答があり、本事業の趣旨に沿う発言や事業前後の変容が多く見られた。個々で記述するアンケートと今回のアンケートそれぞれの良さを吟味し、今後のアンケートに生かしたい。
- 募集定員24名に対して40名、うちリピーター5名の応募があった。これは一昨年度のおよそ2倍、昨年度の1.5倍の応募数であるとともに、リポート意向もあることから、ニーズの高まりがうかがえた。事業の様子の発信やチラシによる宣伝など、参加者確保のための方策をより充実させたい。
- 大雨の中での実施となったが、活動時間や活動内容を柔軟に変更して対応することができた。また雷雨に関して安全確保を徹底し、安全に配慮しながら実施することができた。

1.2 課題

- 大雨によって『72時間チャレンジ』に様々な制約があった。中でも拠点づくりを進められないことにより共用スペースで過ごす時間が多く、活動の充実度、参加者が困難に直面しそれを乗り越える機会が減少した。荒天にも対応しうる代替プログラムを提供していくことが必要である。
- ボランティア事前研修を開催し、サバイバル技術の習熟を図る機会を提供することはできたが、その他の「事業のねらいに迫るための参加者との関わり方」等に関する研修や当日のフィードバックは乏しかった。事業充実のためのボランティアの役割を明確化・標準化し、事業に関わる全員で共通理解を図る必要がある。